

論文

キャンパス外の活動が学修に与える影響について*

——アルバイトに着目した検討——

京都学園大学 経済学部

三保 紀裕

要 旨

学生のアルバイト活動が、大学での本来の学修活動とは異なる影響を学生自身に及ぼしている。これまで、アルバイトが学修に対して与える影響については賛否両論があった。これは、アルバイト活動を通じて得られるものについての評価が多様であったからである。本稿では、学生のアルバイトに対する考え方（アルバイト観）が大学での学修に対する態度や志向性（学習観）にどのような影響を与えるかについて検討を加えた。その結果、アルバイトに対する肯定的評価が大学での学修における積極的姿勢に、アルバイトへの否定的評価は大学での学修に対する消極的姿勢にそれぞれ影響していた。そして、影響の程度はアルバイトを重視する程度、頻度により異なっていた。本稿ではこれらの結果を踏まえ、社会と大学の接続を意識した教育の推進について議論した。

キーワード：アルバイト，学習観，大学教育

1. 問題

社会の急激な変化に伴い、将来予測が困難な時代を切り拓く人材育成が大学に求められるようになってきている。これに伴い、「学士力」「Employability（就業力）」といった、汎用的技能・能力の育成という産業界・地域社会からのニーズに対応すべく、Active learning と呼ばれる双方向型授業（Active learning の詳細については河合塾（2011, 2013）などを参照）や、Internship 等の社会と大学の接続を意識した教室外学修プログラムを推進する動きが起きている（中央教育審議会, 2012）。学修への動機づけを高め、社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果があることから、このような教育的介入が注目されたためである。教

* 本研究は関西大学に提出された博士論文（未刊行）の一部を再分析し、加筆修正を加えたものである。なお、本研究の一部は日本心理学会第 77 回大会（2013）にて発表された。

室外における学生の活動の有効性については、正課外活動を中心として複数の指摘がなされており、正課外活動を通じた経験が授業での知識や、社会人として求められる汎用的技能の獲得にも繋がっていることが報告されている（溝上, 2009; 豊田, 2011; 山田・森, 2010）。

中央教育審議会の答申（2012）では学生の学修時間の短さから、双方向型授業や教室外学修プログラムの推進のためには、質を伴った学修時間の増加・確保が必要であることを指摘している。しかし、このような場合において問題になると考えられるのは学生の教室・授業外における活動、特にアルバイトとの関係である。大学生の活動範囲は多岐に渡るが（清水・三保, 2013）、授業外での活動として多くの学生が経験する活動はアルバイトである（乾, 2012; 岩田・北條・浜島, 2001）。例えば、Benesse 教育総合研究所（2012）は大学生調査の結果から、アルバイトは大学生生活において授業の次に費やす活動であることを指摘しており、アルバイトをしている学生のうち、43.7%が1週間のうち11時間以上をアルバイトに費やしていることを報告している。学生がアルバイトをする理由は様々であるが、主な理由は学生生活を送る上での経済的要因によるものであり（例えば、Broadbridge & Swanson, 2005 など）、学費や生活費の獲得のためのアルバイトは、学生生活の基盤を形成するものである（井上, 2005）。そのため、学修時間を増加・確保しようとするにより、学生生活の基盤形成が阻害される可能性が生じる。

アルバイトは、大学が責任を持って関与する Internship とは明確な区分がなされており（中央教育審議会, 2008）、教育的活動とは異なる性質のものとして位置づけられている。しかし、アルバイトには社会化の促進（木ノ内, 2002）や卒業前からの労働経験の蓄積（Davies, 2000）など、実際の社会生活を経験することによって得られるお金以外のメリットがあるほか、アルバイトを行う理由として「社会勉強のため」といった、経済的理由とは異なる理由を挙げる者が増えてきていることが指摘されている（武内, 2005）。アルバイトと学修の関係については、学業との両立という点から否定的な指摘がなされることが多い（例えば、鶴田, 2001 など）が、社会との接続という点では Internship と類似している部分があると考えられるため、意見が分かれる所である。両者の関係については、異なる性質であるがゆえに相容れることが少なく、これまであまり深く検討されてこなかった。

社会と大学の接続を意識した教育の推進とは、これまで伝統的に行われてきた大学教育とは異なる性質のプログラムを、教育の一環として組み込んでいく試みであるといえる。このように考えると、アルバイトと学修の関係は学修時間の増加・確保に関する問題だけでなく、大学教育とは異なる性質を持ったキャンパス外での活動が、学修にどのような影響を与えるのかということを明らかにする上でも役立つのではないだろうか。学生がアルバイトに取り組む理由や業種・形態は多種多様であるが、アルバイトに対する評価が異なる背景には、学生自身のアルバイトに対する考え方・捉え方の違いが大きく影響しているものと思われる。そこで、本稿では限られたデータではあるが、学生のアルバイトに対する考え方（アルバイト観）が大学での学修に対する態度や志向性（学習観）にどのような影響を与えるのかについて、検討を行うこととする。そして両者の関係性から、学修時間や社会と大学の接続を意

識した教育の推進について考察してみることにしたい。

2. 方法

2-1. 調査参加者

総合私立大学1年生を対象に調査を実施した。有効回答者数は517名（男性194名、女性323名）、平均年齢は18.78歳（ $SD=0.66$ ）であった。なお、調査参加者の所属学部は9学部にあわっていた。このうち理系学部の学生は48名（男性46名、女性2名）、文系学部の学生は469名（男性148名、女性321名）であった。

調査は2009年11月中旬に実施した。講義時間中に受講者への調査の協力を求め、調査参加の承諾を得た参加者のみを調査の対象とした。

2-2. 測定変数

アルバイト観尺度短縮版 アルバイトに対する考え方（アルバイト観）を測定する尺度である。三保（2011）は、「アルバイトの本来的機能」対「アルバイトの副次的機能」、「自律的」対「他律的」の2次元4象限による概念整理を行い、これらの象限に対応した『社会性』『遊び感覚』『面倒』『小遣い稼ぎ』『家計補助』の5つの下位尺度からなるアルバイト観尺度（38項目）を提案している。短縮版尺度（24項目）は、少ない項目数でアルバイト観の多面的側面を測定するために合わせて開発されたものであり、アルバイト観尺度と同じ因子構造であることが確認されている。本研究では、調査参加者への負担を軽減するために短縮版尺度を調査に使用した。

5つの下位尺度の内容は以下の通りである。まず、『社会性』はアルバイトに対して抱く社会的機能を示すものである。『遊び感覚』はアルバイトを楽しむもの、満喫するものであるという傾向を示すものである。『面倒』はアルバイトを面倒なもの、嫌なものであることを示すものである。『小遣い稼ぎ』はアルバイトを小遣い稼ぎのためであることを示すものである。そして、『家計補助』は、アルバイトを家計補助のためにすることを示すものである。短縮版尺度の下位尺度の信頼性係数（ α 係数）は、それぞれ0.906、0.785、0.914、0.875、0.824であった。教示文として、「あなたは、アルバイトをどのようなものとして捉えていますか？」と提示し、各項目について「あてはまる（4）」「どちらかといえばあてはまる（3）」「どちらかといえばあてはまらない（2）」「あてはまらない（1）」の4件法で回答を求めた。

大学での学習観尺度短縮版 大学での学習に対する考え方（大学での学習観）を測定する尺度の短縮版（24項目）である。三保（2011）は大学での学習観について、「大学での学習の本来的機能」対「大学での学習の副次的機能」、「自律的」対「他律的」の2次元4象限による概念整理を行っている。そして概念整理に基づき、4象限に対応した『主体的学習』『自己成長』『単位取得』『受身』の4つの下位尺度からなる尺度（44項目）を提案している。本尺度についても、少ない項目数で大学での学習観の多面的側面を測定するため、大学での学習観尺度と同じ因子構造であることを確認した上で、各下位尺度が6項目からなる短縮版尺

度を作成している。本研究では調査参加者への負担を軽減するため、アルバイト観尺度と同様に短縮版尺度を調査に使用した。

各下位尺度の内容は次の通りである。まず『主体的学習』は、大学での勉強を主体的に学んでいくものであるとする学習観である。『自己成長』は、大学での勉強が自分の成長や将来のために繋がるものとする学習観である。『単位取得』は、大学での勉強を単位のため、あるいは卒業のためのものとする学習観である。そして『受身』は、大学での勉強を受動的なもの、講義を受けていけば良いとする学習観である。短縮版尺度の下位尺度の信頼性係数 (α 係数) は、それぞれ 0.881, 0.902, 0.849, 0.879 であった。教示文として、「あなたは、大学での勉強 (学び) を、どのようなものとして捉えていますか?」と提示し、各項目に「あてはまる (4)」「どちらかといえばあてはまる (3)」「どちらかといえばあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」の 4 件法で回答させた。

アルバイトの重視度 大学での勉強とアルバイトのどちらをより重視しているのかについて問う項目である。教示文として「大学での勉強 (学び) とアルバイト、あなたはどちらの方が大事ですか?」と提示し、①大学での勉強 (学び)、②アルバイト、③両方とも同じくらい大事、④どちらも重視していない、の 4 つの選択肢から、あてはまるもの 1 つだけに回答するように求めた。

アルバイトの頻度 アルバイトの頻度について回答を求めた。教示文として「週に何回程度、アルバイトをしていますか?」と提示し、①毎日、②週 5~6 回、③週 3~4 回、④週 1~2 回、⑤たまにやる程度、⑥アルバイトをしていない、の 6 つの選択肢から、あてはまるもの 1 つだけに回答させた。

2-3. 統計ソフト

本研究の分析には、IBM SPSS Amos Version 21.0 を用いた。

3. 分析と結果

3-1. SEM モデルの構成

アルバイトと学修の関係について、構造方程式モデリング (以下、SEM と表記) による検討を行った。初めに、三保 (2011) の手法に基づき、アルバイト観と学習観のそれぞれについて確認的因子分析 (以下、CFA と表記) モデルを構成した。次に、2 つの CFA モデル間にパスを引き、SEM モデルを構成した。本稿では、学生のキャンパス外での活動が学修に与える影響を研究の焦点としているため、パスの方向をアルバイト観から学習観とした。アルバイト観の各因子から学習観の各因子に対するパスを置き、有意でないパスを削除する形でモデルを構成した。なお分析においては、学習観からアルバイト観へパスを引いたモデルも合わせて構成し、適合度指標の値を比較した。結果、いずれの値もアルバイト観から学習観へパスを引いたモデルの方が適合度指標の値が良く、モデル比較の指標となる AIC の値も低かったことから、2 つの変数間関係はアルバイト観から学習観への関係が適切であると判断

した。採択されたモデル（図 1）の適合度は $\chi^2(107)=145.820$, $P=.008$, $GFI=.969$, $CFI=.993$, $RMSEA=.027$ であり、室橋（2003）や Mulaik（2010）などが示す適合度判断の基準を満たしていた。

アルバイト観からの影響は表 1 に示したように、アルバイトに対する肯定的な側面を示す『社会性』が学びの肯定的側面である『主体的学習』『自己成長』に影響していた。そして、消極的な側面を示す『遊び感覚』『面倒』は、学びの消極的側面である『受身』『単位取得』に影響していた。また、お金を稼ぐという側面を示す『家計補助』『小遣い稼ぎ』については影響を与える方向が異なっていた。『家計補助』は『主体的学習』『自己成長』に影響し、『小遣い稼ぎ』は『受身』『単位取得』に影響を与えていた。お金を稼ぐという点ではこれらの側面は同じだが、何のために稼ぐのかという点で、与える影響に大きな違いがみられた。家計を助けるためのアルバイトには、学ぶための経済的基盤の確保という思いが含まれているようである。これに対し、遊ぶお金を稼ぐためのアルバイトは、学びから離れた方向への意識に繋がっているようであった。

表 1 SEM モデルにおける推定値

	推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準
社会性 ---> 主体的学習	0.263	0.041	0.299	***
家計補助 ---> 主体的学習	0.066	0.035	0.081	†
社会性 ---> 自己成長	0.305	0.048	0.296	***
家計補助 ---> 自己成長	0.151	0.045	0.159	***
社会性 ---> 受身	-0.187	0.044	-0.190	***
遊び感覚 ---> 受身	0.394	0.055	0.384	***
面倒 ---> 受身	0.326	0.035	0.441	***
小遣い稼ぎ ---> 受身	0.160	0.047	0.138	***
遊び感覚 ---> 単位取得	0.175	0.056	0.176	**
面倒 ---> 単位取得	0.152	0.037	0.213	***
小遣い稼ぎ ---> 単位取得	0.299	0.052	0.267	***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

注: アルバイト観から学習観へのパスのみを記載している。

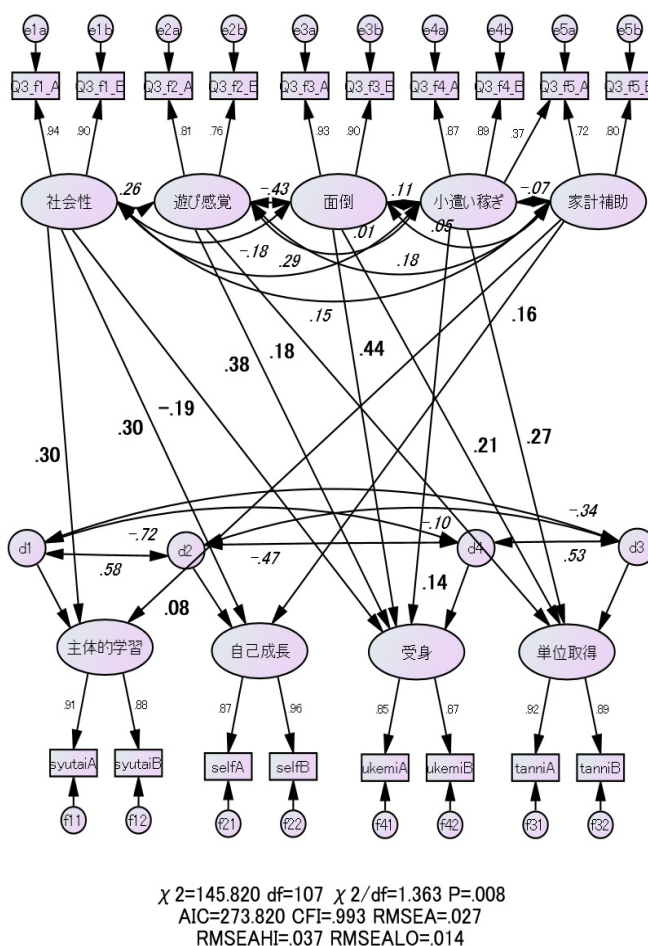


図1 アルバイトと学修の関係についてのSEMモデル（標準化推定値を記載）

3-2. アルバイトの重視度によるSEMモデルの比較

学生のキャンパス外での活動が学修に与える影響は、その活動をどの程度重視するかによって異なるものと思われる。そこで、SEMモデルについて、アルバイトの重視度により調査対象者を群分けし、多群同時分析を行った。分析の対象としたのは「大学での勉強が大事」と回答した306名（男性121名、女性185名：以下「勉強大事」群と記載）と、「両方とも大事」と回答した174名（男性54名、女性120名：以下「両方大事」群と記載）の2群であった。なお、「アルバイトの方が大事」「どちらも重視していない」と回答した者は人数が少なかったため、分析から除外した。

分析においては、構成したSEMモデルをベースに因子パターン不変性（Meredith, 1993; 清水, 2003）を確保した後、各群のパスのうち、有意でないパスを0とした。最終的に採択されたモデルの適合度は、 $\chi^2(228)=292.388$, $GFI=.937$, $CFI=.987$, $RMSEA=.033$ （Steiger(1998)の修正済）であった。

表2に示す通り、学修への意味づけは、アルバイトを重視する程度により異なっていた。学習観に与える影響をそれぞれ見ていくと、『主体的学習』『自己成長』に与える影響はいずれも「両方大事」群の方が大きかった。『受身』に与える影響は『遊び感覚』『面倒』『小遣い稼ぎ』でいずれも正の値を示しており、「勉強大事」群の方が大きい値を示していた。なお、『社会性』から『受身』に与える影響のみ負の値であり、「両方大事」群の方が高い負の値であった。『単位取得』に与える影響は、『遊び感覚』『面倒』については「勉強大事」群の方が高い値であったが、『小遣い稼ぎ』からの影響についてのみ、「両方大事」群の方が高い値を示す結果となった。学びの肯定的側面に対する影響は、「両方大事」群の方が概ね高く、学びの消極的側面への影響は「勉強大事」群の方が高いといえそうである。

表2 アルバイトの重視度別にみたSEMモデルの推定値

		勉強大事				両方大事			
		推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準	推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準
社会性	---> 主体的学習	0.251	0.052	0.294	***	0.276	0.073	0.298	***
家計補助	---> 主体的学習	0.000	—	0.000	—	0.159	0.058	0.221	**
社会性	---> 自己成長	0.254	0.061	0.257	***	0.385	0.084	0.354	***
家計補助	---> 自己成長	0.104	0.048	0.127	*	0.196	0.070	0.233	**
社会性	---> 受身	-0.149	0.055	-0.159	**	-0.198	0.080	-0.195	**
遊び感覚	---> 受身	0.407	0.069	0.368	***	0.252	0.091	0.278	**
面倒	---> 受身	0.356	0.042	0.476	***	0.253	0.064	0.360	***
小遣い稼ぎ	---> 受身	0.138	0.057	0.129	*	0.000	—	0.000	—
遊び感覚	---> 単位取得	0.162	0.080	0.141	*	0.000	—	0.000	—
面倒	---> 単位取得	0.197	0.051	0.253	***	0.000	—	0.000	—
小遣い稼ぎ	---> 単位取得	0.193	0.068	0.174	**	0.431	0.093	0.343	***

***: $p < 0.001$, **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$

注:アルバイト観から学習観へのパスのみを記載。「—」は推定値を0固定したパスである。

3-3. アルバイトの頻度からみたSEMモデルの比較

アルバイトをする頻度は個人により異なるが、頻度が高くなることにより、学修時間の確保という点での阻害が生じることは言うまでもない。そこで、アルバイトの頻度による群分けを行い、多群同時分析によりSEMモデルの比較を行った。アルバイトの頻度については、①～③の週3以上と回答した人を「高頻度」群、④週1～2日、⑤たまにやる程度と回答した人を「低頻度」群、そして⑥アルバイトをしていないと回答した人を「未就労」群とし、これら3群についての比較を行った。各群の人数は「高頻度」群285名（男性97名、女性188名）、「低頻度」群137名（男性55名、女性82名）、そして「未就労」群95名（男性42名、女性53名）であった。

分析では重視度の比較と同様に、構成したSEMモデルをベースに因子パターン不変性を確保した後、各群のパスのうち、有意でないパスを0とした。最終的に採択されたモデルの適合度は、 $\chi^2(352)=494.532$, GFI=.908, CFI=.974, RMSEA=.048 (Steiger(1998)の修正済) であ

った。

アルバイトをする頻度により、学修に対する意味づけは大きく異なっていた（表3）。特徴的であったのは「未就労」群と「低頻度」群、「高頻度」群の違いであった。特に「未就労」群では、『社会性』から『主体的学習』『自己成長』への影響と、『面倒』から『受身』への影響が顕著にみられた。『社会性』からの影響は、頻度が上がるに伴って値が低くなり、『面倒』からの影響は頻度の上昇に伴い値が高くなっていた。アルバイトをしていない者とそうでない者ではアルバイトに対する認識が異なり、それが学修に対する意味づけの差に繋がっているようである。アルバイト観から学習観に対するパスの数も頻度により異なっており、「高頻度」群の方が学習観に与えるパスの数が多かった。例えば、『家計補助』から『主体的学習』『自己成長』への影響は、「高頻度」群のみにみられた独自の傾向であった。

いずれにおいても共通していたのは、アルバイトに対する肯定的な側面は学びの肯定的側面に影響し、アルバイトの消極的側面は学びの消極的側面に影響しているということであった。ただし、影響する程度は群により異なり、「未就労」群では肯定的側面からの影響が高く示されたのに対し、「低頻度」「高頻度」群では消極的側面からの影響が比較的高く表れていた。

表3 アルバイトの頻度別にみた SEM モデルの推定値（パスのみを記載）

	高頻度				低頻度				未就労			
	推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準	推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準	推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準
社会性 ---> 主体的学習	0.217	0.053	0.251	***	0.344	0.078	0.380	***	0.270	0.075	0.308	***
家計補助 ---> 主体的学習	0.111	0.050	0.121	*	0.000	—	0.000	—	0.000	—	0.000	—
社会性 ---> 自己成長	0.223	0.063	0.219	***	0.429	0.088	0.431	***	0.474	0.099	0.453	***
家計補助 ---> 自己成長	0.180	0.063	0.167	**	0.000	—	0.000	—	0.000	—	0.000	—
社会性 ---> 受身	-0.190	0.058	-0.189	***	-0.175	0.082	-0.181	*	0.000	—	0.000	—
遊び感覚 ---> 受身	0.524	0.080	0.489	***	0.304	0.088	0.321	***	0.000	—	0.000	—
面倒 ---> 受身	0.342	0.050	0.430	***	0.349	0.060	0.511	***	0.260	0.067	0.346	***
小遣い稼ぎ ---> 受身	0.213	0.075	0.156	**	0.000	—	0.000	—	0.000	—	0.000	—
遊び感覚 ---> 単位取得	0.252	0.074	0.261	***	0.000	—	0.000	—	0.000	—	0.000	—
面倒 ---> 単位取得	0.189	0.050	0.263	***	0.000	—	0.000	—	0.187	0.080	0.251	*
小遣い稼ぎ ---> 単位取得	0.334	0.077	0.270	***	0.312	0.092	0.285	***	0.259	0.104	0.262	*

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

注: アルバイト観から学習観へのパスのみを記載。「—」は推定値を0固定したパスである。

4. 考察

本稿では、学生のキャンパス外での活動が学修にどのような影響を与えるのかについて、アルバイトに着目した検討を行った。SEMモデルによる分析から、アルバイトを「社会を知るための手段」として捉える場合においては、それが主体的な学び、自己成長のための学びに影響することが示された。このことは、アルバイトによる社会化の促進（木ノ内, 2002）という指摘とも合致するものであり、アルバイトを学びに関わりうるものとして認識するか否かが結果に大きく関係しているものと思われる。アルバイトを「遊び感覚に近いもの」「面倒」

と捉える、いわば「やる気の無さ」とも取れる意識が学修に対する消極的意識に影響していたことから、同様のことが考えられる。これまでも、アルバイトが学修に与える影響については賛否両論であるとの指摘(吉田, 1998)がなされているが、これらはいずれも、アルバイトに対する意味づけとその多様性による結果であるといえるのではないだろうか。アルバイト観における『家計補助』『小遣い稼ぎ』が学修に与える影響の違いは、お金を稼ぐという点では同じ意味を持つが、「何のために働くのか」という意味づけによる差を顕著に表していた。

学生のキャンパス外での活動が学修に与える影響は、キャンパス外での活動をどのように意味づけるかにより大きく異なる。このことは、アルバイトの重視度による比較からも明らかであった。「両方大事」群の方が、アルバイトに対してもそれを重要なものとして意味を見出しているため、「勉強大事」群よりもアルバイトに対して抱く社会的機能が主体的な学び、自己成長のための学びに大きく影響していた。アルバイトへの否定的態度が学びに対する消極的意識に与える影響は、「勉強大事」群の方が「両方大事」群よりも大きかった。アルバイトよりも大学での学修に重きを置いている分、大学での学修とアルバイトが乖離していることが少なからず関係しているものと思われる。これらの結果は、これまでの伝統的な大学教育とは異なる性質のプログラムを学修に繋げていく上での示唆を提供するものであるといえる。現在、Internship や PBL (Problem-Based Learning) 等の地域・企業参画型プログラムを推進していくことが強く求められているが、このようなプログラムを学修に繋げていくためには、プログラムが学修上重要であることを認識させることが必要なのではないだろうか。これらのプログラム構築においては、カリキュラムにおけるプログラムの位置づけや教育目標、教育内容の設計に焦点が置かれることが多い。しかし、プログラムを通じた教育効果の定着や脱落者の予防を考える上では、プログラムへの意味づけを重視することが必要であるといえる。例えば三保(2012)は、Active learning 系の授業における脱落者は、大学での学修に対する自己成長的意識が低く、受身的意識が高いことを明らかにしている。このような脱落者を極力減らすという点からみても、プログラムに対する意味づけは重要であると思われる。

学生のキャンパス外での活動が学修に与える影響の差については、アルバイトをする頻度による比較からも明らかにすることができた。「未就労」群ではアルバイトからの肯定的な影響が強くみられたのに対し、「高頻度」群ではアルバイトからの否定的な影響が強くみられた。そして、「低頻度」群では両方の傾向をみるることができた。アルバイトの頻度が増えていくにつれ、アルバイトとして従事している職務内容の詳細な理解が促進されていく。合わせて、アルバイトに対して抱く良い面のみならず、悪い面や学修との乖離についての認識も促進されるため、このことが学修に与える影響の違いに関係しているものと思われる。ここではアルバイトの頻度に応じて、アルバイトに対する意味づけが「憧れ」的なものから「惰性」に近いものへと変化していることが分かる。このような背景には、職務内容が単調なものであることが考えられるほか、大学での学修のような教育的介入がなされないことが理由

として挙げられる。これらの結果は長期 Internship のような、長期間にわたるプログラムを実施する場合における示唆を提供するものである。プログラムに関わる頻度が増えることにより、そこでの取組内容がルーティン化し、学びに対する消極的な意識への影響が強くなっていく。このような影響を防ぐためには、プログラムの過程において、定期的に大学での学修に繋げていく指導が必要なのではないだろうか。プログラムにおける取組内容が大学での学修における専門科目等と直接的に結びつくことは、比較的少ないかもしれない。しかしこれまでも述べてきたように、学生のキャンパス外での活動は、社会人として求められる汎用的技能とは比較的結びつく可能性が高いことが指摘されている。例えば、清水・三保(2013)は大学卒業生に対する回想的調査において、社会人基礎力に最も影響を与えたと考えられるものを、大学生活での活動領域から一つだけ選択させている。そして、対応分析による結果から、アルバイトはクラブ・サークル活動と近い関係にあるほか、「意見の違いや立場の違いを理解する力」「他人に働きかけ巻き込む力」「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」「社会のルールや人との約束を守る力」との関係性を明らかにしている。プログラムにおける取組内容と汎用的技能の関連性については更なる研究の蓄積が求められる所であるが、教育面においては、このような点を意識させるような指導が必要であると考えられる。

授業外の活動への参画に伴う学修時間の増加・確保は、生活基盤を確保するためのアルバイトを阻害することになる。家計補助のためのアルバイトが主体的な学び、自己成長のための学びに影響を与えているように、本稿では大学で主体的に学ぶためのアルバイトという意識を捉えている。このことは、学修に注力したいが経済的事情によりアルバイトに長く従事せざるを得ず、結果として学修における不都合が生じうるジレンマを抱えることを意味している。質を伴った学修時間の増加・確保を推進していくためには、奨学金支援の体制強化を合わせて行っていかなければならないだろう。

本稿で使用したデータは私立大学1校のみを対象としたものであるほか、学生のキャンパス外での活動の1つとしてアルバイトに着目したものである。そのため、学生が取り組む活動内容によっては学修に与える結果の偏りが懸念されるため、注意を払う必要がある。本稿ではアルバイトに着目した検討を行ったが、PBL や Internship を始めとする地域・企業参画型のプログラムが学修に与える影響については更なる研究の蓄積が必要であり、今後の展開を待たねばならない。これについては実践場面における介入効果の測定などから実証データの積み重ねを行っていくことが必須であり、今後の課題である。学生の一般的傾向を捉える基礎研究と現場を通じての実践研究、両面からの研究を地道に蓄積していくことが、学生の実態把握とそれを踏まえた教育改善の Evidence を示す上で必要なのではないだろうか。

引用文献

- Benesse 教育総合研究所 (編) (2012). 第 2 回大学生の学習・生活実態報告書 Benesse 教育総合研究所
- Broadbridge, A., & Swanson, V. (2005). Earning and learning: how term-time employment impacts on students' adjustment to university life. *Journal of Education and Work*, **18**, 235-249.
- 中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申) 文部科学省
- 中央教育審議会 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ— (答申) 文部科学省
- Davies, L. (2000). Why kick the "L" out of "LEarning"? The development of students' employability skills through part-time working. *Education and Training*, **42**, 436-444.
- 井上 理 (2005). 学生サービスの開発へ向けたオフ・タイム行動の位置づけ IDE, **473**, 17-22.
- 乾 彰夫 (2012). 若者が働きはじめるとき—仕事, 仲間, そして社会— 日本図書センター
- 岩田弘三・北條英勝・浜島幸司 (2001). 生活時間調査からみた大学生の生活と意識—3 大学調査から— 神戸大学『大學教育研究』, **9**, 1-29.
- 河合塾 (編著) (2011). アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか—経済系・工学系の全国大学調査からみえてきたこと— 東信堂
- 河合塾 (編著) (2013). 「深い学び」につながるアクティブラーニング—全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題— 東信堂
- 木ノ内博道 (2002). 「学生アルバイト」の現状 IDE, **438**, 43-47.
- Meredith, W. (1993). Measurement invariance, factor analysis and factorial invariance. *Psychometrika*, **58**, 525-543.
- 三保紀裕 (2011). 大学 1 年生における入学後の変化と諸相—進学理由・学習観を中心とした検討— 関西大学大学院博士論文 (未刊行)
- 三保紀裕 (2012). キャリア関連科目の介入効果—学生の在籍率に着目した検討— 日本心理学会第 76 回大会発表論文集 2EVB06.
- 溝上慎一 (2009). 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, **15**, 107-118.
- Mulaik, S. A. (2010). *Linear causal modeling with structural equations*. New York, NY: Chapman & Hall/CRC.
- 室橋弘人 (2003). 適合度指標概論 豊田秀樹 (編著) 共分散構造分析 [疑問編] 朝倉書店 pp.122-125.
- 清水和秋 (2003). 構造方程式モデリングによる平均構造の解析モデル 関西大学『社会学部紀要』, **34** (2), 83-108.
- 清水和秋・三保紀裕 (2013). 大学での学び・正課外活動と「社会人基礎力」との関連性 関西大学『社会学部紀要』, **44**(2), 53-73.

Steiger, J. H. (1998). A note on multiple sample extensions of the RMSEA fit index. *Structural Equation Modeling*, **5**, 411-419.

武内 清 (編) (2005). 大学とキャンパスライフ ぎょうせい

豊田義博 (2011). キャンパスライフに埋め込まれた学習—何が、社会人としての適応をもたらすのか?— リクルート『Works Review』, **6**, 8-21.

鶴田和美 (2001). 学生相談から見た留年学生の修学上の問題 大学と学生, **440**, 50-54.

山田剛史・森 朋子 (2010). 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割 日本教育工学会論文誌, **34(1)**, 13-21.

吉田隆夫 (1998). アルバイト学生の就労意識に関する調査研究 (I) 芦屋大学論叢, **29**, 81-97.